

アベンジャーズ・ジャ
パニースヒーロー

ヤカラナリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ちよつとだけエスパー能力が使える日本人大学生は旅行先でヒーローに会い戦いに巻き込まれる。彼はアベンジャーズに会い何を思い、何を失うのか？

ニワカです。

目次

その1・ウルترون編	1
その2・ウルترون編	13
その3・ウルترون編	20

その1・ウルトロン編

その日、俺はアフリカのワカンダと言う場所に訪れていた。

ワカンダは最近、自国で採掘される特別な鉱石の存在とその活用法を公表した国だ。その技術は1世紀以上先の未来技術の様でその範囲は医療・通信・軍事・製造などとにかく多岐にわたる。

しかしその技術を得ようと多くの国の人々が足を運び、1つ1つを見れば小さな…しかし塵を積みこんで山を作ったかの様な多種多様な問題を抱えた国でもあった。

そんな国へ俺は日本の大学の夏休みを使って旅行に来たごくごく普通の…少しだけエスパー的な一般人の日本人大学生だよ。

本場に少しだけだよ？あんまり強くないよ？エスパー能力。

物を浮かせたり飛ばしたり、自分で飛べたり…まあそんな感じ。『スゲーじゃん！』て思われるかもしれないけど正直な話使えない。

だってさ…俺がこの能力で得した時なんて女の子のスカートをめくった時くらいだけ？でつかい岩持ち上げるとかほぼ無理、ボーリングの玉持ち上げただけでまあまあ疲

れるし、使い過ぎるとガス切れして暫く使えなくなる。

つーか、俺のエスパー能力は感覚的に文明の利器に負けてる。(エスパー能力よりスマホのが便利)

まあそんな俺はワカンダの郊外で観光を楽しんでいた。カエルは鶏肉みたいってよく聞くけどホントだね、むしろカエルの方が味がしっかりしてて、好みにカエルの方が好きかもしれない。その姿が生理的に受け付けなければ…。

あと黒豹ののTシャツに一目惚れした。黒の生地にも黒のプリントとか言う頭の悪いクール感!! 決してオススメして来た店員さんのおっぱいが大きい事に感動したからではない。でも黒肌の大きいおっぱいは素晴らしい。

一休みに入ったオーブンカフェでメロンソーダに出会った。日本でもワカンダでもメロンソーダはメロンソーダだ。メロンの果実なんて一滴も入っていない着色料マシンで不健康な色したメロンソーダは日本で飲むメロンソーダとまったく同じ味で俺の心を解きほぐしてくれる。

嗚呼、なんて素晴らしいメロンソーダ。

なんかスキンヘッドの女の人がいた。何処ぞの民族衣装的な装いで気が強そうな感じだ。でもよく見れば美人さん? スキンヘッドはオシャレ説?

近くにヤベー組織のアジトがあるらしい。怖いもの見たさで行きたくなっただけ

やっぱり怖いから辞めた。実は高校時代の文化祭でやってた隣のクラスのお化け屋敷にすら行けなかったのは秘密。

暇そうな地元警察の人にオススメのレストランを聞いた。

S U S I !? 何故? なんでもこんなところに S U S I が!?

ワカンダの王様ポスターがあった。見慣れてないからなのかな? 黒人さんてみんな同じ顔に見えてしまう。でもいい人らしいよって〇チャンネルの人が言ってたし、古事記にも優しいって書いてあったらしい。ワカンダの王様はいいひと。

立ち寄った公園で日本人と遭遇。関西人だったけどここでは日本人。広い公園の端にはバスケットコートが2つのあって現地の子供達が楽しそうにあそんでいる。出会った関西人と子供達の試合を見ながら何気ない雑談をした。

日本を離れて数日なのにすでに懐かしく感じている。

遠くでなんか爆発した。なんだなんだと現地の野次馬さんたちと音がした方向かかっていると廃船場で爆発が起きたらしい。最初は残った燃料がなんか爆発したのかと思っただけど一層派手な爆発と1つの船から飛び出した2つのロボットが空中で撃ち

合っているのを見て何かの抗争的なものと分かった。

アレは噂に聞く『アイアンマン』？トニースタークっていう有名な社長が乗る正義のロボットらしき物。はへー…俺のエスパーの100倍すごい動きで戦ってるよ、本職のヒーローは凄いい。

なんて思いながら対岸の火事的な感じで観戦していると近くで別の破壊音がした。その方角を向いてみると緑色の怪物が暴れていた。

!!
緑色の怪物は屋台や民家を壊し、時折咆哮を上げて街を恐怖に陥れるーってマジか

俺は緑の怪物に向かって走り出す、現地の人達が逃げ惑う中、緑の怪物を軽く観察すると人っぽい見た目だ。しかし身長より縦幅の方が大きく、腕に至っては俺の胴体と同じくらいの大さだ。

緑の怪物に目測100メートル位に近づいた俺は近くの石をエスパー能力と掛け合わせて投げる、普通の人なら骨折するくらいの威力はある筈の投石は右肩にポヨンと当たって全く効いてないのが分かった。

全く効いてはいなかったが緑の怪物に俺へのヘイトを向けることは成功したらしく俺に向かって突進して来た。俺は邪魔になると背負っていたカバンを下ろして緑の怪物へ走る

緑の怪物は突進しながら右手を大きく振り上げ俺に落としてくる、俺はエスパー能力で軌道をずらしながら大きく回避して第一撃を避ける、続けて迫る左拳を同じ要領で躲す。

それを1つ2つと繰り返すうちに遠くからパトカーのサイレンが聞こえた、なんとかコイツの相手をしているうちに警察が来てくれたらしい。

途端にカキユンと鳴った、緑の怪物の頭に銃弾が当たったらしいが：無傷だ、嘘だろ？

どうやら俺に当たらないように注意しながら緑の怪物へ銃撃しているらしいが、結局は傷1つ合わない緑の怪物。

緑の怪物は苛立ったのか俺から目を離して他の警察官へと向おうとしてーさせるか！

俺から目を離れた瞬間、怪物に肉薄してがむしやらに殴る蹴る叩く、振り払おうとした怪物の拳を避けながら距離をとって、今一度エスパー投石！

怪物がこちらへ向けた目を見て俺は精一杯の見栄を張って

「もつと遊ぼうぜ！緑ゴリラ!!」

言葉が通じたのか咆哮を上げて緑ゴリラは俺に突進、俺も突進しながら相手を考察する。

まず攻撃方法は腕のみで足技や噛み付きの類は無し、

俺のようなエスパー能力も無ければ肩からロケットランチャーが起動する事もない、シンプルだ。

ただし当たると致命傷、下手しなくても死ぬ、掠っただけで吹っ飛ばされる。またシンプル故にパワーとスピードで押しこめる。

対応策としては「攻撃する勢いで回避」が最適？

背中を向けたら死ぬと思うし退く事を考えた瞬間死ぬ。

次に勝利条件、現状不可能と言っている。

銃弾すら跳ね返す皮膚に俺の攻撃が効くわけがない、何処ぞのゲームよろしく「火に弱い」とか「水に溶ける」なんて可能性も無くはないが検証は不可。

ただし、「現状」だ。

これだけの騒ぎだ、既に軍隊的なものが動いているだろう。特にワカンダの新技术は軍事的にも大きな力を持つ（らしい）

または警察官達も何か策があるかもしれない。

つまりは「被害を抑えつつ時間を稼ぐ」現状はかなりいい展開と言っている。警察は避難活動を始めてるだろうしこの緑ゴリラを抑えてるだけで十分だ。

問題が2つ、

1つは「ガス切れが近い」あと数分で俺はエネルギー使い切って能力を使えなくなる、エネルギー尽きたら？死ぬ。でもそれを考えてはいけない。

2つ目は「打てる手札がない」俺だけに絞ればもうやれる事はエネルギー使い切るまで躲し続ける事だけだ。まあ分かつてはいるけど後は「逃げることにすら出来ない」

1つ2つ3つ、攻撃を躲してタイムリミットが迫るのを感じる。余裕があるわけではない、けどどこまで考えて退く事もできず戦い続けるしかない俺の頭に浮かぶ…、

「浮かんでしまった」

【怖い】

ただ一瞬の恐怖に体が強張る、そしてその一瞬は俺が詰むには十分過ぎた。

怪物の拳が俺を捉える、回避は不可能。持っている全てのエネルギーをなんとか防御

に回し……そのまま吹き飛ぶ、何かの店の扉に激突して中にぶち込まれる。

運良くソファに受け止められた俺は意識半分には怪物を見る。

俺から目を離して勝鬨のような咆哮を上げていた。

心の何処かに安堵と達成感が産まれた。

(俺にしては良くやった)

(後は誰かが何とかしてくれる)

(俺にできる事はもうない)

言い訳がましいがそういうもんだらう。

むしろ運が良かったのかもしれない。

何気無く窓の外を見ると――

S U S I レストランを教えてくれた警察官がおっぱいが大きい服屋の店員さんを背負って走っていた、店員さんの足はありえない方向に曲がっていて肩から大量の血が出ていた。

「行くか」

能力はもう使えない、でも行かなきゃいけない、理由なんて分からない。でも戦わなければならぬ。

足はガクガクとしていてろくに立てそうにない、

(でも折れてるわけではない)

当然怖い、

(だからなんだ)

十分戦った、

(本当にそうか?)

勝手に湧いてくる言い訳を振り払って立ち上がる。

屁っ放り腰だ、情けない、

(戦わない理由にはならない)

ふと周りを見るとこの店は銃を売ってる店だった。

棚にあった名前もわからないマシンガンのような銃を手に掛け落ちていた拳銃を二

丁拾ってズボンのポケットに一丁ずつ仕舞う。

壊れた入り口から警察官を威嚇する怪物を睨む。

「まだ終わってねえぞオラアア!!!」

銃口だけ怪物に向けてマシンガンを撃ちまくる、

ガガガガツと鼓膜が破れそうな音と銃弾が怪物に向かうが当然のごとくダメージはなさそうだ。

俺に気がついたのか吠える怪物に無策突進する

途中で球が切れたマシンガンを投げ捨てて右側のポケットにある拳銃を撃つ、

拳が来る、転ぶように躲す、

撃つ、撃つ、撃つ、

両手を握ってハンマーのような拳の振り下ろしを躲す、

飛び散る瓦礫に足がやられる、

痛い、

(だからなんだ!)

一心不乱に撃つ、撃つ、撃つ、弾が切れた、

持っていた銃を捨てて最後の銃を構えて撃つ、

カシャン、と間が抜けたような音がした、弾が入っていなかった、カシャンカシャン

と引き金を引く無駄、

怪物はノツシノツシと俺に歩み寄る、

怖（くない！）

一か八か立ち上がる、右足が痛むが立てない事はない、

拳を握る、もうどうにでもなれ！！！！

「うおおオオオオ!!」

吠える、走る、戦う！

怪物の拳を避けて殴る蹴る叩く、突き飛ばされた、転がりながら何とか意識は保つ、

「まだだ！少しでも時間を稼ぐ!!!」

瓦礫に手をかけてなんとか立ち上がる都合よく手元にあつた鉄パイプを握って杖の

ように使いながら…

前へ…前へ！

そしてー

「良くやったジャパニーズ、後は引き受けよう。」

赤のボディに黄金のアクセント、俺の身長を優に超えるロボットが俺と怪物の間に降り立つ。

その姿はまさに「ヒーロー」

俺はその姿に安心して意識を手放した。

その2・ウルترون編

「…に向かっている?」「秘密の…れ家さ、もうすぐ着くから休んでいろ」

気がつくと、何かの乗り物の中にいた。独特の浮遊感から飛行機的なものが高速で移動しているのが分かる。周りを見ると…なんとというか心理的な感じに暗い。

照明的な意味もあるけれど、こう…雰囲気が悪くて重い。取り敢えず変な体勢で横たわっていたので起き上ろうとすると音で気がついたのか、1人の男(トニー・スタークだ)が近づいて来た。

「やあ、目覚めたか? ジャパンニーズ。」

「えつと…どうも?」

正直な話、どういう反応をすればいいのだろうか? たぶんきつとこの人に助けてもらったのだろう。それに相手は世界的大企業のお偉いさんだ。下手に出るのが正解なのだろう。

「まだ意識がはっきりしないみたいだな。」

そりゃそうよ、だってさっきまで…っ!

「あの緑の怪物は!? 町はどうなってる」

「ああ、落ち着け落ち着け。まず緑の怪物……ってハルクだな、ハルクは問題ない。もう暴れたりしない」

ステイ、ステイとジェスチャーをしながら俺が気絶した後の話をしてくれた。

まず緑の怪物はハルクという名前で仲間だったらしい。

そしてワカンダに敵のアジトがあると分かったアベンジャーズ（この団体の名前）が敵のアジトを奇襲、しかし苦戦を強いられ、船で待機していたハルクが敵からの洗脳を喰らい、街で暴れてしまった。そこに俺が登場してハルクを足止めしていた、ここまではOK。

「ちなみにそのハルクってのは二重人格で後ろにいるバナー博士がその宿主だ。」

振り向くとバナー博士？（少しぼっちやり気味の天然パーマな理系おじさん風）が申し訳なさそうな顔をしてこちらを見ていた。……若干ホラーっぽい感じでビビったのは秘密。

「その……申し訳ない、操られていたとはいえ君を危険な目に……」

バナー博士が謝る姿を見て何と無く中学時代の担任を思い出した。あの人は若干臆病で人見知りするタイプの“THE・隠キヤ”な人だった。その担任とバナー博士が重なる。

対して緑の怪物……ハルクはアレだ。

アメフトの漫画で見た「喋る事すら捨てたキチガイ運動部」だろう。言葉のほとんどがカタカナでセリフの半分以上が咆哮か奇声のヤベー奴。

「えつと…大変そうっすね。」

合わないなんてレベルじゃねえ！むしろお互い関わらないで生きるくらいが正しい筈なのに二重人格とか辛いすぎだろ。

「え、まあ…」

バナー博士は気が弱そうだが：強く生きて欲しいと思った。

そして話は戻る、トニー・スタークが操るアイアンマンによってハルクは正気を取り戻したが、敵はワカンダの基地を放棄して何処かへ行ってしまった。行先が分からなくなった敵の動向を追う為、拠点へ移動しようとしたが、アベンジャーズの不信任や敵の妨害などが影響で拠点へ帰るのは危険。

よって現在運転手のホークアイさんが秘密基地的な場所へ連れて行ってくれている…らしい。

あれ？

「なんで俺はこの飛行機に乗っているんですかね？」

些細な疑問、俺はアベンジャーズではないしその敵さんと因縁的な物がある訳ではない、むしろ無関係といつてもいいかもしれない。

「それは……こう……流れで？」

「流れ!？」

流れとは？え？ひよつとして拉致的な感じ？ウソでしょ？

恐る恐る窓を見ると雄大な自然とのどかな街並みが見える。

分かる……分かるぞ。確実にワカンダじゃない！

外国だ!! ついでに日本でもない！

「よし、着いた。着陸態勢に入る。」

ちよつと待つて!え?マジで言ってるの?

コレは不法入国? いや待て、拉致されて連れてこられたんだからまだマシ?

マシじゃねえ!!

地上に降り立つ飛行機、目の前には“THE・田舎の家(アメリカ版)”が立ってい

てテンション低めのメンバーが一人一人降りていく。

メンバーの表情は暗いがその顔触れはなんだか「只者じゃない」感じで、雑に言ってしまうば「みんな強そう」だった。

そして運転していたホークアイさんが先導して家へと入って行く。

ホークアイさんが家の鍵を開けて中に入ると、40才くらいの女性と少し気難しそうな小学生くらいの男の子と幼稚園にギリ入れるかなくらいの子のお出迎えしてくれた。

流れに身を任せて話を聞いていると、ホークアイさんは既婚者でメンバーにも内緒で家庭を持っていたらしい。そしてホークアイさんはお兄ちゃんの方を、飛行機から降りたメンバーの中で唯一の女性（ナターシャさんというらしい）は妹ちゃんの方を抱き上げ簡単な自己紹介をする流れとなり、最後に俺へと視線が注がれる。

考えてみれば俺はこの人達に自己紹介をしていない。

この人達が悪い人では無い事はなんとなく分かるが…そうだ。

「俺の名前はゴンベエ・ナナシノ。」

日本の大学生で経営学の簿記とかが専門だけどグローバル化も研究課題にしてる。ワカンダで巻き込まれて…なんか流れで連れてこられました。」

ーゴンベエ・ナナシノー

「名無しの権兵衛——」

偽名を隠す気は更々ない、けどそれっぽくごまかしながら言うのと。

「流れとは何だ？」

金髪ががっしりした体型のおじさん（手には金属ハンマー）に睨まれる。

「それは俺が一番言いたい。なんか飛行機に乗せられてここにいます。ああ、あとついでにエスパーです。」

そう言つて机の上にあつた空のカップを空中に浮かせ

「物を浮かせたり、飛ばしたり、」

カップを空中でクルクルと回転させたり、

「少しだけ浮けたり、」

カップをそのままに俺自身が宙に浮く、（10センチほど）

「まあそんな感じ。」

カップを机の上に戻し、俺自身も床に着地する。

「そして……この地点で俺の使うことのできるエネルギーが4分の1使いました。」

最後の一言を言つた後何人かが（嘘だろオイ）みたいな顔で「はあ？」と言つた。

「いや……マジだよ？俺そんな強く無いよ？」

落ち着いて落ち着いてとジエスチャーすると、金髪のおじさんは（期待外れだ）と言つ

た感じにそっぽ向く。そんな状況でトニー・スタークは爆弾発言。

「だがタイマンでハルクを五分以上足止めした男だ。全くの弱者というわけでは無い。」

そう言うとは人かが俺を観察するような目つきで見ると。

どうやらハルクはこの中でも上位の強さらしい。

俺が自己紹介を終えた後、金髪のおじさん（ソーというらしい）がボソツと何かをつぶやいたかと思うと玄関へと向かった。その後を追うように筋肉モリモリのイケメン（かの有名なキャプテン・アメリカさん）が追いかける窓から様子を見てみると、ハンマーを使って空を飛んで行った。何を言ってるか分からないがその意味のままどっかいった。

どうでもいいけど思った。

（ハンマーに飛行能力ってアンチシナジーじゃね？）

その3・ウルترون編

流れ…そう、“流れ”でおれはホークアイさんのお宅にお泊まりする事となった。

どうでもいいことかも知れないけど「ホークアイ」と初めて聞いた時、“十字の黒大剣を背負った世界一の剣豪”を思い浮かべたのは俺だけだろうか？現実は弓使いらしくヴァンパイア要素のカケラもない“理想のお父さん代表”みたいな人だった訳だが…。

まあそんな事はいいか。俺はトンデモナイことに気が付いてしまった。

俺は…

なんと…

『財布とスマホとパスポートを入れたカバンをワカンダへ忘れてしまったのだ!!!』

(その1・ウルترون編参照)

コレは由々しき問題だ。

あの人達はみんな世界平和の為に戦っている隣で俺は“一歩間違えるとホームレス

一直線”状態であり、この家が何処（の国）にあるかは知らないが、少なくとも俺は”
不法入国者”だ。

冷や汗が止まらない。

（アレ？俺ってこんなに詰んでたっけ？どうしよう…）

カバンには財布やスマホだけでなく学生証や家の鍵なども入っていて…いや待て、俺は今何を持って……………？

【悲報】俺氏、現在の所持品

シャツ・ジーンズ・パンツ・靴下・スニーカー。

……以上（それ以外は何も所持してない）

……異常だろ。

いや待て、どうしてこうなった？

今ならハルクとの戦いで投げ捨てた弾無しの拳銃すら惜しく思えてきた。

「なんとかしなくては……………」

【Sidell・ナターシャとバナー博士】

行動を起こす。

廊下に出て誰に助けを求めようかと歩いていると誰かの声が聞こえた。

(この部屋は…博士とナターシャさんのところか…)

思えば何故か俺はこんな必死なのに、なんとなくコメディ感のある困り方をしているのだろうか？断片的に聞いた感じ、アベンジャーズはかなり不利な状況になっているらしく…アレだ、かなりシリアスな感じのハズだ。

「ダメだ…僕なんかじゃ…こんな家庭は築けない。」

君を不幸にしてしまう。」

聞こえてしまった、めっちゃシリアス。

扉を見てみると【子供部屋】と書かれていた。まあアレだ、あの2人はあの兄妹の部屋を借りているという訳か。

「私も、化け物みたいなものよ。不妊手術をしたの、戦う為に…。」

マジかよ…俺が思う3倍シリアスな話してる。

他のトコ行こう。こんな雰囲気です…あつ

ゴテン！

ナターシャが自分の過去を告白し、バナー博士に愛を伝えようとした瞬間扉の前で音がした。

『聞かれた！』慌てて扉を開けると、転んだ状態のナナシノがいた。

「違う！」

ナナシノは慌てて弁解を始めた。

「俺は何も聞いてない！2人の会話なんて聞いてないし！ナターシャの過去の話も聞いてない！なんにも聞いてないから！」

遠目で見ていたバナー博士は思った。

(ひょっとしてこの人、バカなんじゃ…)

ナターシャがナナシノに説教をする事20分

解放されたナナシノが申し訳なさそうに自分の現状を伝える2人は啞然とする。

「僕…ココまで追い詰められた人見るの初めてかも知れない」

「貴方…想像以上にヤバいわね」

先程とは打って変わって同情の眼差しがヤバい。

しかも問題なのが…

「そういえば…ココ何処？」

「それは…あれ？」

【悲報】説教された。

それはそれとして成果無し。

(side 2・ホークアイ)

俺は2人に別れを告げてホークアイさんの元へ向かう。

とりあえず親に連絡したい。もはや時差やら現状やらを考えたく無い。とりあえず思考停止で親の声を聞いて安心したい。

ホークアイさんがいる部屋に到着し何は無くともノックする。

もう変なタイムリングで入ってしまうリスクがあっても変な空気を味わいたく無いし、説教されたく無い。

「おお、ナナシノか…どうした？」

扉が開いて中に招かれ、立ち話。

部屋の中にはホークアイさんのみだった。

既婚者に当てはまるのか分からないが、ホークアイさんには謎の『アニキ感』があつて安心出来る。

俺の現状を伝えて電話を借りたいと言うとホークアイさんは困った顔をして暫く考えた後、2、3度頭を振つて申し訳なさそうに言った。

「済まないが電話は勘弁してもらえないだろうか？ウルトロンはインターネットを自由に閲覧できると聞いた。わずかな可能性とはいえこの家が敵に晒される可能性がある…。」

成る程…仕方ない。

「ああ、そうかなんかすいません。我儘言っちゃつて…」

「いや、君が悪いわけでは無い。

「こちらこそすまない。こんなことに巻き込んでしまつて。」

それな。しかしここまで来ると……誰に文句を言うべきだろうか？ホークアイさんには申し訳ないし、バナー博士に言うのはなんとなくヤダ。ナターシャさんに言えば……説教される？

そう思っているとカコンと小気味いい音が外から聞こえた。窓から外を覗くとスタークさんとキャプテンアメリカさんが薪割りをしていた。

「成る程……」

思えばここに連れてきたのはスタークさんなのだろう（おそらく）そしてアベンジャーズのリーダーはキャプテン・アメリカさんだ。（だってキャプテンって入ってるし）

「この文句はあの2人にぶつけなければいいのか……」

「ん？おっおう……そうなるかな？」

「じゃあ行つてきます、ありがとうございました。」

ホークアイさんに一礼して意気揚々と2人の元へ向かう。

「…本当に、こんなことに巻き込んでしまつてすまない」

ナナシノが去つたドアを見つめながら呟くように言うホークアイ。

彼はアベンジャーズという場所とその仕事に誇りを持つている。邪悪から市民を守り、その為に戦うこの仕事を。

この仕事には怪我が尽きない、自分だつて先の戦場で重傷を負つた。しかし怪我で済めばマシな方だ。仕事中に死んだ仲間をこれまで何度見てきたことか：それを思うとあんな気持ちのいい青年を戦場に巻き込んでしまったこと、元の場所へ帰すことも連絡をさせてあげることすらも出来ない事が申し訳無く思う。

正直彼の事はあまり分からないと言つていい。しかし、「いい奴」だと思う。明るく前向きで、思いやりがある。だが特異な点があつてエスパー能力がある。しかしそれはソーやロキといった宇宙人と比べれば微々たるもので、戦闘力的に見ても、戦闘経験が無い事を加味すれば、一般の軍人より低いだろう。

初めてスタークから話を聞いた時、青年が暴走したハルクに立ち向かつた事を聞いた時、耳を疑つた。ハルクを一目見れば普通の人間が勝てない事くらい分かる。自分だつてハルクと戦うなんて御免だ。だからどんな戦闘狂の奴かと思えば、なんて事はない。

「何処にでもいそうな性格の日本人」だ。特別な人間では無いし、彼の「現状」を聞けば独特の残念感に肩透かしを食らう。

ナナシノは自分達が何度も救ってきた普通で普通の市民の1人だ。戦う力を僅かに持っていたとしても本質は普通の青年。

そんな彼がこの戦いに踏み込んでしまった事が本当に申し訳ないと思う。

ホークアイはベットに座り溜息をつく。

どうしようもなく自分が無力だと感じた。

(side3・キャプテンアメリカ・アイアンマン)

カコン、カコンと2人は薪割りをしている。隠れさせて貰っている彼らにせめてもの恩返しのもりであり、手持ち無沙汰でもあった。

作業に慣れてきたキャプテンアメリカは口を開く。

「ナナシノはどういう人物だ？」と

スタークは手を止めずに喋り出す。

「エスパール能力を持つ日本人…だな。しかし僕の見立ては真面目で実直な好青年。エスパール能力こそオマケだろう」

カコン、カコン

スタークは頭の中で彼の戦いを回想する。

ウルトロンと戦う最中、ハルクが暴走していることに気がついた。その時にはもう遅くハルクが街へ入ってしまった後だった。ウルトロンを逃すわけにもいかずマスク内のウインドウでハルクの様子を横目に見ていた。

ハルクを足止めしているナナシノを見て感じた

「彼は恐怖している」その上で「恐怖を乗り越えて戦っている」と。それは自分には無い強さでもある。

一度吹っ飛ばされ、また立ち上がり、そこからの側から見ても分かる精一杯の空元気を振り絞った無謀な戦闘は自分には無いある種の「輝き」の様なものも見た。

「僕がこういうのもなんだけどね、アイアンマンなんかよりよっぽど【ヒーロー】だよ。彼はね」

キャプテンは何を感じたのか一層強く斧を振り下ろし、額の汗を拭う。

「彼は無関係な一般人だ、戦いに巻き込むわけにはいかない。」

「分かっている、しかし…彼が必要な気がする。」

サイコキネシスを使う双子の妹は厄介な事に我々に「悪夢」を残した。無論仲間達

が自分の力で悪夢を振り払う事を疑っているわけでは無い。

しかし、時間が無い。立ち直るための「希望」があるとすれば、それをスタークがナナシノに感じた「恐怖を乗り越えて戦う姿」に重ねる。

カコン、カコン、カコン、

2人はしばらく無言で薪割りを続ける。

「そういえばソーはどこへ行った？」

スタークはなんとなく口に出す、

するとキャプテンは薪割りを続けたまま、

「彼は気になることがあると言つてどこかへ行った、ワープゲートを使ったわけでは無いから地球にはいるだろう。」

それを聞いたスタークは眩く様に、

「最強のアベンジャーズが今は散り散りだ。」

皮肉交じりに言う。

その言葉を聞いたキャプテンは持っていた丸太を腕の力で真つ二つにして、「誰のせいだ」とスタークを睨む。

俺は文句を言う為に庭に向かっていた。

スタークさんに言うべきかキャプテンさんに言うべきか？少し考えたがスタークは社長、つまり口が上手い。世界中のほとんどの人が彼のスピーチを聞いてアイアンマンの格好良さに心震わせた事があるだろう。ならばキャプテンさんに言うべきか？

(そうだな、キャプテンさんに言おう。)

そう思つて通りかかった廊下の窓から2人を見ると

『バギィ』と両手で丸太を割るキャプテンさんが見えた。

「死ぬわ」

何だアレは？ゴリラか？足元に斧あるよ？

斧あんの腕で薪割りとか筋肉どうなってるの？

文明の利器より筋肉なの？

考えてみればアイアンマンとかハルクとかいる中であの人リーダーやったんだよな？強いに決まってるよな？あんなのに文句言ったら、片手でリングゴ砕く要領で頭蓋骨砕かれるわ。

よし、

(やっぱ平和が一番だ)

文句なんて言ってはいけない。アレだろ？あの人達は正義の味方でアベンジャーズだろ。俺みたいいな小市民が文句言っていていい存在ではない。

(side 4・ナナシノ・ゴンベエ)

さて、意気揚々とUターンして数歩歩くとリビングに到着した。そこではお兄ちゃんが教科書とノートを反復横跳びする様にカリカリと勉強していて、妹ちゃんは退屈そうに積み木で遊んでいる。

俺に気が付いたのか妹ちゃんが俺を指差して「あつ、さっきのお兄ちゃん！」と言った。

そんな妹ちゃんをお兄ちゃんが「おい、人を指差すなよ」と諫める。そんな2人に「別に気にしなくていいよ」と言って歩き出し声を掛けた。

「コレは…学校の宿題？」

ノートを盗み見ると教科書に書いてある数学の応用問題を写してあって、よく見ると計算式が間違っているのか答えがほとんど間違っていた。

「うん、でも分からないんだ…。」

お兄ちゃんはバツが悪そうにノートにペンをポツポツとつつく。

「お兄ちゃんが宿題終わるまで遊んでくれないの」

妹ちゃんはつまらなそうに眩く。

「よし、じゃあ教えてやるよ」

そうして俺はお兄ちゃんに宿題を教えながら、片手間に妹ちゃんと遊んだ。そして宿題を終えたお兄ちゃんと妹さんと一緒におままごとをやった。

【朗報】 アイテム獲得

お兄ちゃんから宿題を手伝って貰ったお礼として「赤と黒の2色ボールペン」、妹さんからおままごと中に「オモチャの指輪（小指にギリ嵌る）」を貰った。